

I氏賞についての余滴

鍵岡正謹

「岡山県新進美術家育成」と重い副題を冠しながら軽やかな「I氏賞」がある。岡山県出身の伊藤謙介氏が、若手詩人に与えられるH氏賞にならいI氏賞と名付けられた。岡山県にゆかりのある若手の美術家が育つためにと、I氏は岡山県に多大の資金を寄付し、それをもとに基金として運営される。多くの推薦者に推された岡山県ゆかりの美術家の作品を書類選考とI氏賞選考展と二度の審査を経て、大賞1名と奨励賞2名が決まる。受賞者には自由に使える賞金が与えられ、数年後には県立美術館で受賞作家展に出品され、さらには出品作品の購入もされる。▼平成19年度に始められたI氏賞はすでに7回を数え21名の受賞者がいる。受賞者には大西伸明、松井えり菜、加藤竜、下道基行らがいて、絵画や写真の現代美術家として知られ、国内外を舞台に活躍している作家を輩出している。▼先ごろ県立美術館では「よにんの素材が表現する“今”」と題した第4回I氏賞受賞作家展が開催された。平成21年度と22年度、第3回と4回I氏賞で奨励賞を受けた、版画の小野耕石、織物の手塚愛子、絵画の佐藤亮太、木彫の灰原愛の四作家展である。彼ら／彼女らが受賞後に制作した美術作品は目覚ましく新鮮であった。素材を生かす手法は高度で、若々しい感性が“今”を生きる美術家の造型思考となり、明快に表現されている。実に頼むしくも澁刺としたコンテンポラリーな美術展となっていた。▼本号が刊行される時期には8回目の「I氏賞」の作家選考がはじまり、大いに期待が高まる。「I氏賞」に祝福あれ！と思わずビックリマーク(エクスクラメーションマーク)をつけたくなった。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース107号をお届けします。当館の設計を手がけた建築家・岡田新一氏が去る10月27日にご逝去されました。本誌は101号でリニューアルをして以来、表紙には「美術館の紹介」をテーマに写真を掲載していますが、昨年度発行した号では表紙担当者が岡田氏に直接お話を伺い、当館の建築にまつわる様々なエピソードを教えていただきました。岡田氏のこだわりが大いに込められたこの建物について多くの方に知っていただけるよう、今後も本誌をとおして美術館の活動とともに紹介していきたいと思います。

「美術館の紹介」vol.7

中庭に、無駄のない重厚な美術館の外観とは一味違うデザインの石柱が置かれている。これは旧東警察署から移された柱頭装飾であり、ぐるりを覆う細かな文様を確認できる。



ムーミンがやってくる

石原 亜弓(学芸員)



『ムーミン谷の彗星』1946年 挿絵、インク ©Moomin Characters™ Tampere Art Museum Moominvalley

トーベ・ヤンソンの生誕から100年が経ちました。

スウェーデン語を話す少数派のフィンランド人として生まれ、芸術一家の長女として育った彼女は、2002年に亡くなるまで創作を続けた多才な人物でした。14歳で挿絵を描き、15歳の頃には風刺漫画を発表するなど、彫刻家と挿絵画家の両親の血を受け継ぎ、生まれながらのアーティスト気質を備えていました。「しあわせな子ども時代がなかったら、ムーミンの物語は生まれてこなかっただろう。」*と言わしめるほどの「すてきな夏」のある島の空き家で過ごし、ムーミンの世界感に繋がる人間性を育んでいきます。さらにストックホルムやヘルシンキで絵を学び、本格的に挿絵や風刺漫画を描いたり、短編の物語も創るようになっていきます。その後パリに留学しフレスコ画や服飾美術を研究しており、トーベのデザイン的な画風もここを経て確立されていったともいえます。彼女の手掛けている仕事には、知られている作品のほかにも油彩画や絵本、イラストレーションに壁画などがあり、それらに関するラフスケッチや構想画も多く残されています。70年前に第1巻が発表されたムーミンシリーズですが、今なお読み継がれており、世代を超えて愛される奥深さを感じさせます。文章と挿絵だけでなく、それらの組み方まで手掛けているトーベだからこそその表現の仕方を、今の時代の人々も快く受け止めているということなのでしょう。

ところで「ムーミン」といえばまず初めに何を思い浮かべるでしょうか。

白くてまるい、動物のような様相のいきもの…最もポピュラーかつ名高いキャラクターの姿はもちろんですが、その「ムーミントロール」以外のキャラクターたちも多く、個性的な面々が

揃っています。奔放で冒險が好きなムーミンパパ、穏やかでしっかりもののムーミンママ、ひょうきんな友人のスニフ、身体がちいさくてもしっかりした考えをもった皮肉屋のミイ、孤独と自由を愛する知的な親友のスナフキン、ガールフレンドのスノークのおじょうさん…ほかにも大勢のキャラクターが登場します。彼らはみな、お祝いにはパーティをひらいたり、走り回ってみんないっしょに遊んだり、お茶をするのが日課だったり、優しくもきびしくしなめてみたり、歌を歌うのが好きであったりと、各々違う役割のもと、ムーミントロールに関わっています。ムーミン一家の屋敷で人心地ついて骨を休めながらも、ときにはトラブルを解決へと導くなど、彼らがいてこそこのムーミンシリーズだといえるでしょう。ムーミントロールが成長するときには、その世界を取り巻くキャラクターも同じように成長を遂げているのです。

当館では3月20日より開催されるムーミン展ですが、会場内で原画を確認したとき、その絵の小ささに驚く姿が浮かんできます。展示室内に飾られているタペストリーは、多くがこの小さな原画を拡大しているものです。丁寧なデッサンとそれを生かす細密なインクによる線描によって、トーベの作品は劣化することなく幅広く活用され続けています。加工しているにもかかわらず、画像がひどく荒れたりしていないことに彼女の緻密な仕事ぶりが窺えます。ムーミンシリーズの挿絵も、版数を重ねることや出版される国によって数度の書き直しを行っており、そこから画家としてのトーベの生真面目な気質を感じとりながら、童話作家としての独特な表現も再認識できるはずです。

本展では、タンペレ市立美術館・ムーミン谷博物館が所蔵するオリジナル原画やスケッチ等約200点に、さらに造形作家の制作したムーミン谷の再現ジオラマを展示し、物語の主要なテーマである「自然との共生」に焦点を当てながら、個性豊かなキャラクターたちが活躍する魅力溢れるムーミンワールドを紹介します。数多くの日本初公開の作品で構成される、トーベの生誕から100年を記念したこの展覧会を、ぜひ楽しみにお待ちください。

*『MOE』1994年6月号「素晴らしい芸術家としてのトーベ・ヤンソンを知る」より

特別展「トーベ・ヤンソン生誕100年記念 MOOMIN! ムーミン展」

会期:2015年3月20(金)~4月19日(日)

休館日:月曜日

会場:当館地下展示室

◎12月19日から前売り券販売開始

前売り券:一般800円、ペア1,400円

当日券:一般1,100円、65歳以上900円、高大生700円、

小中学生500円

前売り券販売所:当館ミュージアムショップ、山陽新聞社サービスセンター、岡山県内主要プレイガイド、

セブン-イレブン(セブンコード:034-725)、ローソン

チケット(Lコード:65877)、チケットぴあ、サークル

K・サンクス(各店共通Pコード:766-513)



『ムーミン谷の夏まつり』1954年 挿絵、インク
©Moomin Characters™ Tampere Art Museum Moominvalley

よにんの“今”が集う場所 「I氏賞受賞作家展」後記

古川 文子(学芸員)

「誰も見たことのない作品をつくりたい」——既存の素材や技法に新たな解釈と手法を見出し、独自の表現を提示する四人の「I氏賞」奨励賞受賞者による展覧会を、当館2階展示室で開催しました(2014年11月8日-12月14日)。シルクスクリーンによる版表現の限界に挑む小野耕石は、前号で紹介した《Hundred Layers of Colors》を過去最大規模の33枚組で壁一面に展開、数ミリのインクの柱を一つ一つ動物の頭蓋骨等に移植した立体作品も時間の凝縮による存在感を醸し出していました。織物から丹念に糸を引き抜き、内なる構造や時間を空間へ導き出す手塚愛子の手法は、表現としての独自性とともに「見える」という認識への再考を促す知性を感じさせます。作品設置の際の糸の扱いなど、細やかな配慮も印象的でした。ニューヨークへ留学中の佐藤亮太は、展示空間の在り方に着目し、新たな試みを見せました。繊細な感覺による絵画や立体を心地よく見せるのことより、空間全体として見る側の意識に問いかけるような展示構成に取り組んでいます。木彫に淡い彩色を施した灰原愛の作品は、独特の抒情性を湛えています。樹木の命を思い、彫刻できる時間が幸せと語る彼女の言葉に、日本の伝統に通じる心はせを感じました。四者四様の素材と表現が集う展示室には、いつもと少し違う景色がひろがっていました。

ご存知のとおり「I氏賞」は、岡山県にゆかりのある新進美術家を支援するための事業です(詳しくは、館長コラムをご覧ください)。受賞の数年後に当館で開催する展覧会で彼らの“今”を体感するとともに、その後の活動を長く見守っていただければと思います。さらに、本賞に関わる多くの方々、ご来場いただいたお客様にとっても、若い感性に触れ、新鮮な気持を呼び覚ます場となるよう願っています。

このほど、第8回「I氏賞」の一次選考通過者13名が発表されました。年明けの選考作品展(会場:岡山県天神山文化プラザ 2015年1月27日-2月8日)には、どんな作品が並び、どんな受賞者が生まれるのでしょう? 皆さまどうぞお楽しみに。



小野耕石、手塚愛子作品展示風景



佐藤亮太、灰原愛作品展示風景

広がり続ける小野絵麻・二三のために

高嶋 雄一郎(学芸員)



「小野絵麻・二三 人間・幻想・自然展」会場風景

美術家には数多の困難が常に付きまとつものだが、それは彼らがただ一人の人間であり、何よりも美術そのものを取り巻く「環境」——それは社会や自然、もしくは歴史とも言い換えられるだろう——とも分かち難く結びついているからに他ならない。小野絵麻は、そうした中でも特に逃れ得ない周囲からの困難に見舞われた画家だった。その最たる例は1962(昭和37)年の類焼による自邸と殆どの絵画作品の焼失であり、次いで1972(昭和47)年の山陽新幹線開通による強制立ち退きが挙げられる。これ以外にも傷痍軍人となっての除隊と兵役の免除もあの時代においては一つの「挫折」であるだろうし、もっと言えば、画家を目指しながらも親の反対に遭ったがため教師という職を隠れ蓑にして画業を続けんとした若かりし頃の一種の「曲折」も、彼の内面に少なからず影響を与えたのではないか。

それでも、先日まで開催されていた「小野絵麻・二三展」会場を見渡した時にとりわけ顕著だったのが、やはり火災以前の作品が極めて少ない——つまりは、それによる焼失が如何に大きかったかということだった。戦争を跨いで描かれた高梁を描いた風景画や、1960年前後に描かれた独自の重厚なマチエールによる特異な生物を主題とした初期の作品群は、大きな変革を迎えて充実していた活動のごくごく一端を今日に伝えてはいるが、その質に対して展示室に占めるその割合は不適に小さく、ともすれば晩年の作品が持つ社会風刺などによる「明快」

な不気味さに気圧されていたきらいもあるのではない。

しかし、失われてしまった作品を類推することは難しくとも、それ以降に制作された作品や作風から、彼の美術に対する姿勢や考え方の変化は窺えるだろう。まず、冒頭に述べた自分を取り巻く「環境」に対する人間の圧倒的な無力感、それゆえの自嘲ともつかないアイロニー、冷淡なまでの対象との距離感、などが挙げられる。また、場所性に対する感覚の欠如——どこでもなさ、夜を舞台とした作風に象徴される自らの立ち位置の不明瞭さなども、こうした住居に恵まれなかつたことによるのかもしれない。

ただし、こうした物質的・環境的な不遇を越えて、彼が教育者として人の繋がりや成長に後半生をほぼ捧げたのは、彼が残した美術への最大の功績だったと言えるだろうし、まさしく或る慧眼の持ち主だったことを裏付けている。思えば晩年に描かれた、生物の表皮に「眼」がびっしりと描かれ、まるで細胞一つ一つが自我を持つかのような大作の数々は、彼とその妻のもとから多くの卓越した後進が育ちつつあったことを想起させざるにはいられない。つまりは、当館における二人の初回顧展は好評のうちに幕を下ろしたが、小野絵麻と二三は、今もなお終わっていないのだ。彼らの余波は、まだ脈々とそこかしこで蠢いている。そう、先に出版された画集と本展を基点に、その活動は今もなお広がりつつあるのである。

新収蔵品紹介

File 03

浦上春琴筆『山水画帖』
中村 麻里子(主任学芸員)



浦上春琴『山水画帖』のうち第12図 文化6(1809)年

本頁では、当館で平成25年度に購入した浦上春琴(1779-1846)筆『山水画帖』について紹介する。まず作者春琴は、江戸時代後期の画人。姓は紀、名は選、字は伯挙・十干、号は睡庵・二卿・文鏡亭など。浦上玉堂の長子として岡山に生まれる。

寛政6(1794)年、玉堂・春琴・秋琴の父子3人は大坂の木村蒹葭堂を訪れたのち、城崎から脱藩状を岡山へ提出し、江戸へ向かう。当時春琴は16歳であった。玉堂は秋琴を連れて会津に向かい、秋琴を会津藩へ出仕させた後、江戸に戻り春琴とともに各地を遊歴する。文化5(1808)年に春琴は、備後の頼山陽と知り合ったのち単身長崎へ向かっている。文化8(1811)年京都に戻り、結婚。京都柳馬場に居を構え、父と同居を始める。独自の山水を描き続けた父とは対照的に、写生に基づく優美な山水・花鳥を描いた。在世当時は父を凌ぐ人気作家であり、洗練された氣品のある花鳥画の名手として知られていた。

本作品は、全12図からなる画帖で、各図は色紙サ

イズよりわずかに大きい本紙(絹本、各27.2×28.4cm)に描かれる。本帖が制作された文化6年は、ちょうど春琴の長崎在住時にあたる。当時の長崎は、西洋や中国など異国文化輸入の窓口であり、文化発信の地であった。『芥子園画伝』『八種画譜』などの中国の画

譜類や、中国画人の肉筆画を、たとえ一流の画人のものでなくとも、文人画家たちは大変貴重なものとして尊重している。狩野派など従来の絵画を見飽きていた人々にとって、長崎に来た絵画は鮮烈な印象を与えた。春琴も中国の画論や明清絵画に強い憧憬を抱き、中国画人の画法に倣った作品を多く残した。

第12図に「文化己巳夏月模／唐伯虎畫為／幻翁禪師清鑒／春琴紀選」とある。「唐伯虎」とは、明代の画人唐寅(1470-1523)のこと。蘇州の人。人物や花鳥、山水など、あらゆる画題を描き豊かな才能を發揮した。北宋画や南宋の院体画風であり、緻密で濃彩の高度な技法を駆使し、富貴な中国文人趣味が漂う画風である。唐寅の画風に倣った本帖は、春琴31歳の作品で、12図ともに濃麗に描かれた山水の中に、文人の日々の営みが描かれ、漢詩が賦されている。当館では別作品で53歳時の『春琴帖』も所蔵しているが、両者を比較すると、後者はゆったりした余裕を感じさせる筆づかいであるが、前者には若き春琴の中国画を学ぶ熱意が画中より感じられる。

春琴の若書き作品として、画風の変遷をたどるのに重要な作品であり、鑑賞価値も高い。南蘋派風の花鳥画等と合わせて、春琴の長崎における中国画学習についてさらなる調査研究が必要であると思う。

展覧会スケジュール

12月
December

11月8日|土|—12月14日|日|
【岡山の美術展】
第4回I氏賞受賞作家展
よにんの素材が表現する“今”
【同時開催】
日本伝統工芸展関連事業
もっと伝統工芸 備中漆

1月
January

2015年1月9日|金|—2月22日|日|
【特別展】
プライベート・ユートピア ここだけの場所
プリティッシュ・カウンシル・コレクションによる英國美術の現在

2月
February

本展は、英國の公的国際文化交流機関プリティッシュ・カウンシルの収蔵品から、約30名の作家による約120点を厳選した現代美術展です。1990年代から2012年のターナー賞受賞作家エリザベス・プライスまで、絵画や写真、映像そして立体など、今までに注目を浴びている英國美術に触れる貴重な機会となるでしょう。

3月
March

3月14日|土|—4月19日|日|
【岡山の美術展】
目の目 手の目 心の目
体感の向こうに広がる世界

2015年3月20日|金|—4月19日|日|
【特別展】
トーベ・ヤンソン生誕100年記念
MOOMIN! ムーミン展

今もなお世界中で愛され続ける「ムーミン」。本展は原作者トーベ・ヤンソンの生誕100年を記念した、日本初公開作品を多数含むかつてない規模の原画展です。タンペレ市立美術館・ムーミン谷博物館が所蔵するオリジナル原画、習作、スケッチなどを通じて、奥深いムーミン世界の魅力をお届けします。

展覧会期間中、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

- 1月18日|日| 14:00～15:00
記念講演会
「90年のイギリス・アートシーンを振り返る」
講師 東島毅氏(画家)
会場 地下一階講義室(先着70名)
- 1月23日|金| 18:00～19:00
美術の夕べ
「イギリスの90年代以降のカルチャーとともに」
講師 高嶋雄一郎(学芸員)
会場 地下展示室 ※要観覧券
- 1月24日|土| 13:30～16:00
workshop
「茄子図〈宮本武蔵〉に倣う」
講師 森山知己氏(日本画家)
会場 研修室、展示室